

なくそう貧困。命の水を！

アジアネット

JAFS

NEWS & REPORTS 2019年春

137



特集 パンダン水道の20年後を訪ねる



since 1979

公益社団法人アジア協会アジア友の会
Japan Asian Association & Asian Friendship Society

JAFS

●主な目次●

「巻頭言」 着眼大局 着手小局	02
特集＝パンダン水道の20年後を訪ねる	
日比の友情結んだ「地上の星」たち	04～06
障がい児用スクールバスを贈呈	07
ネパール、スタディーツアー	08・09
ネパール、環境プログラム	10・11
インドネシア植林キャンプ体験記	12・13
J A F S 40周年を前に②	14・15
井戸寄贈報告	16～19
タイに広がる自転車・車椅子活用の輪	20
「新・The 社会貢献」法人会員紹介	21
「JAFS プラザ」＝国内の活動	22～23
ひと味違うアジア学ぼうー市民大学が開学 ／「応挙と幽霊…」講談楽しみ新年会／百 貨店で井戸をP R／心を表す『ばけもの図 鑑』／アジアのちびっこ画伯たちの絵画展	
新入会員紹介・領収報告	24・25
「アジアの友から」	25
J A F S 40周年記念事業のお知らせ	26
「環境コラム」	27



アジア協会アジア友の会とは

アジア18カ国に井戸を贈る国際協力団体（NGO）です。1979年に大阪で設立。誰もが生まれてきて良かったと思える社会を目指し、2018年3月現在、井戸建設（累計1949基）や植林（累計253万本）、子ども教育支援を中心に活動しています。全国都道府県認可の社団法人取得第1号団体です。2012年4月1日からは、内閣総理大臣の認定を受け、公益社団法人になりました。

海外との交流・協力活動は、インド、インドネシア、バングラデシュ、タイ、マレーシア、フィリピン、スリランカ、ネパール、韓国、カンボジア、シンガポール、ミャンマー、ラオス、中国、ベトナム、モンゴル、パキスタン、アフガニスタン、さらに西アフリカのブルキナファソにも広がり、友情のネットワークが形成されています。

日本国内でも、各地でチャリティープログラム、自然環境プログラムなどを行っています。

※ホームページ <https://jafs.or.jp>

本会へのご寄付は、寄付金控除の対象です

J A F S は内閣府より公益社団法人としての認定を受けています。J A F S への寄付金や会費（社員会費は除く）は、申告によって、所得税、法人税、相続税について税制上の優遇措置（寄付金控除）を受けることができます。

確定申告の際、税額控除、所得控除のいずれか有利な方を選択できます。本会発行の領収書を添付して申告してください。法人税は損金の額に算入することができます。相続税は最寄りの税務署などにお問い合わせください。

巻頭言

私は1942年生まれで、二人兄弟の次男です。父は建設業を営んでいました。祖母は産婆さんで、往診に使っていた駕籠や人力車は悪ガキの遊び道具でした。戦後の貧困の時代、父母は「困っている人を助けるのに理屈はいらない」が口癖で、私の友達を家に呼んでは食事を食べさせ、着なくなった衣服を持たせて帰っていました。私のなかではそれが当たり前になっていました。

そんな私も高校受験を前に大病を患い、二次で大阪鉄道高校に合格し、お世話になりました。

恩師・瀬島源三郎先生の「偉大なる平凡人たれ」の教えと開放的な校風が合ったのか、自由奔放な3年間を過ごすことができました。

着眼大局 着手小局



森本 榮三
アジア協会アジア友の会
常任理事

卒業後は大学に進学せず総合建設会社に入社。主として建設省発注の河川改修、国道建設の現場を12年間、その後、社長室直轄の安全衛生担当を任せられ、40歳まで勤務のあと独立し、森本グリーンサービスを設立、土木・造園の仕事を始めました。

アジア地域とのつながりは、1979年にノーベル平和賞を授賞されたマザー・テレサが、1981年に

来日されたことに始まります。東京であった「命の尊厳を考える国際会議」での講演を聞き、翌日大阪・金ヶ崎と一緒に回った際、お話をさせて頂く機会があり、厚く「私にも何かお手伝いできることがありますか」と質問しました。

マザーは「カルカッタに来て私たちが何をやっているかを見れば、何をしなければいけないか、何ができるかわかる」と話され、「神の愛の宣教師会」の住所と、「マザー・テ

イルフレッド君の夢を助けるため、マニラY M C A 総主事の助言を受け、何度もマニラに渡り、学費の援助をし、高校、大学を卒業させ、彼は夢がなつて医師免許を取得、スラムに小さな診療所を開設できました。

今の私は国際奉仕団体のY M C A、ワイズメンズクラブ、ロータリークラブに活動の場を与えられています。一般財団法人カンボジア地雷撤去キャンペーンでは大阪事務所を提供し、責任者として若いボランティアの皆さんの活動を支援し、後継者が育つことを願っています。

J A F S には1998年、村上事務局長のお誘いを受けて入会。会員としての務めも十分に果たせないまま今日に至っていますが、孔子の弟子・荀子の言葉「着眼大局・着手小局」（目の付け所は大きく、実践は小さなことから）を心掛け、多くの皆様に奉仕することの大切さが分かって頂ければと願っています。

●プロフィール●

もりもと・えいぞう
1942年、大阪府高槻市生まれ。
60年、大阪鉄道高等学校（現大阪産業大学附属高等学校）卒業。82年、森本グリーンサービス設立、現在、相談役。2018年よりアジア協会アジア友の会常任理事。

JAFS 会員綱領

私たちは、世界の平和と人間の基本的人権を守るために人々との「友情と信頼」に基づく「理解と協力と連帯」の輪をアジアと世界に広げます。

かかる目的をもって私たちJAFS会員は以下のことに努めます。

一、より人間らしい地球社会の創造をめざします。

一、アジアと世界の人々の幸せに奉仕します。

一、地球の自然環境を大切に守ります。

一、生活の無駄を省き、地球資源を大切にします。

一、これらの奉仕活動を通して、自分と他人の生命の価値を高めます。

以上



水源地マロンパティに設けられた公営の水浴公園には澄んだ水があふれ、家族連れや若者でにぎわう
＝フィリピン、パナイ島。筆者撮影

日比の友情結んだ 「地上の星」たち

パンダン水道事業 建設20年後の現場を訪ねる

2年前に通水20周年を迎え、本誌128号で報告したフィリピン「パンダン水道パイプライン事業」の現場を、1年半の時を経て、2月8名のメンバーが訪れた。新たなパイプライン計画は？ マロンパティの水質と水量は？ 期待と少しの不安を胸に訪問した私たちは、驚きとうれしさに包まれた。電気で稼働する新たなポンプが増え、ポンプ室からのパイプが2本に増えていた。その水を受ける大きなタンクも1基増設されていた。安全な水がほしいという要望が、パンダン町周辺の町からも届き、パイプラインの拡大が進められている。最高の水質を保ち住民の健康を守るために、ドイツ製のフィルターも5月に導入する予定だ。水源地のマロンパティは多くの観光客と地元家族連れで、歓声と笑顔にあふれていた。パイプラインができるまでは、誰も想像できなかった風景だ。パンダン町の人口は近い将来に4万人を超える。持続可能な開発には、住民一人一人が環境保全に意識を向け、日常生活を見直す挑戦を続けていくことが必要だ。

命の水、5年後には8千件供給へ

JAFS会員 中村正憲
(元朝日新聞記者)



今年40周年を迎えるJAFSの歴史の中で、最大のプロジェクトと言われる「パンダン水道パイプライン事業」の現場を訪ねた。昨年7月、この事業の映画化を紹介する記事を朝日新聞に書いた縁で、村上公彦事務局長から「現場を見ないか」と誘われた。1月、新聞社を辞めたのをきっかけに、視察チームに同行した。現場に立つ

て、これは多くの無名の人たちが成し遂げた壮大なプロジェクトだと知った。いま何度も、中島みゆきの歌「地上の星」が心の中でリフレインする。

市民でにぎわう水源地

マロンパティはフィリピンの首都マニラから約350km南に離れた島、パナイ島の北にある泉の名前だ。世界的なリゾート地、ボラカイ島に近い。2月17日、快晴。午前中から30度を超えた。パンダン中心部から約10km先のマロンパティを車で目指した。

道中、「この下に直径30cmのパイプがずつと埋まってるんや」と村上さんが言った。ツルハシで深さ1・5m

の穴を掘り、長さ6mの水道パイプを埋めていった。ときに岩盤があれば砕いたり、迂回したりして進んだという。当初は資金繰りも目処がつかない。気の遠くなる話だ。五体投地して尺取り虫のように進むチベット巡礼の映像を見たことがあるが、その行為が生やさしくすら思えてくる。

マロンパティに着くと、屋台や土産物屋が立ち並ぶ公営の水浴公園となっていた。入場料40ペソ（85円）という看板があった。コバルトブルーの天然プール（幅30m、長さ約100m）は、砂地の川底まで見通せる。対岸まで泳いで往復した。冷たい。中央部は深さが3mを超え、20cmほどの魚が数匹、銀色のうろこを輝かせていた。両岸は家族連れや若者らであふれ、高飛び込みや、上流からのラフティングを楽しむ観光客で混雑していた。

人口増に備え今も増強

水道管の青いパイプは2本に増強されていた。現地で迎えてくれたパンダン町水道局マネージャーのアドウィン・アルヒパンさん（43）は「去年12月に2本目のパイプを増設した。それでもまだ6割の需要にしか応えていない」と話した。人口増が背景にあり、井戸から水道に変えようとする家庭も急増しているという。パイプラインプロジェクトの実行委員長だった田中久雄理事長は順調に稼働するパイプラ



障がい児用バスを贈り教育を応援

2月18日、パナイ島にあるパンダンセントラルスクールで、障がい児のためのスクールバスの贈呈式が、教職員、保護者、パンダン障がい者協会、AFSパンダン、JAFSメンバーら約120名が出席して行われた。

同スクールは北部アンティーク県の唯一の障がい者特別支援学級をもち、パンダン自治体だけでなく、セバステヤリベルタッドのような近隣の自治体からも障がいを持つすべての学習者を受け入れている。

パンダン町によれば現在、障害のある人は609人いて、うち59人が学齢期でありながら、通学が不可能なために障がい者学級に登録されていない。35人が通学中だが、手助けする人がいなかったり、交通費が大きな負担となっていたりして、毎日通学できないでいる。子どもたちが将来自立するためには教育が不可欠で、毎日通学できるようにすることは、家族、学校の先生方にとっても大きな願いだった。

現地からの要請に、パンダン障がい者協会名誉会長の小柳二郎さんとパロンパイクラブ会長の中谷誠さんが立ち上がった。フィリピンやパンダンにゆかりのある人らに協力を呼びかけて短期間に心温かい支援が集まり、スクールバスを贈れることとなった。

AFSパンダン代表のネリーさんが、エンジンがしっかりといて安全に長く乗れる中古車を探し、いくつも

の販売店を何度も訪ねて粘り強く交渉した。一番いい車を見つけてパンダンに到着したのは何と贈呈式の前日！関係者一同、胸をなでおろした。

贈呈式では、同スクールとパンダン障がい者協会が、自分たちの力では通常のプログラムを行うのが精一杯だったことなどを話し、心からの感謝の気持ちなどを伝えた。また、バスは学校が責任をもってメンテナンスし、地域の人々と共に子どもたちの安全を守っていくと約束してくれた。

子どもたちが楽しいダンスやファッシュショー、歌にスポーツなどを披露した。一人一人ポーズを決めるしぐさに拍手喝采！一生懸命な姿と成長ぶりに、思わず目頭を押さえる参加者も多かった。村上JAFS事務局長と小柳さんがバスの鍵を学校に手渡し、バスのテープカットが行われた。

贈呈式の後、子どもたちはバスに乗り込み、これからこの車で通学できることをとても喜んでた。

素晴らしいと感じたのは、障がい者がコミュニケーションの中でとても温かく見守られていることだ。本人も周りも一生懸命で、個々人の良い所を伸ばそうとし、互いを幸せにするために何ができるかと考え、行動につなげている。水道パイプライン事業で強められた地域のきずな、ボランティア精神はここにもしっかりと根付いている。

（JAFSスタッフ 岡本佳子）

インを見て「感無量です」と語った。90年8月のこと、大阪市内の協会事務所に電話がかかった。相手は慶応大学院生のアマンテと名乗るパンダン出身者だった。「故郷が塩水の混じる水で苦勞している。井戸を掘ってほしい」と彼は言った。

唐突な要望に耳を傾けたのが村上さんだった。事業はここから始まり、パンダン町民に給水する水道パイプラインは94年4月に着工、99年3月に完成した。当時、パンダンの人口は2万6千。今は4万に迫る勢いだ。13年に2千件だった給水件数（水道メーターを備えた戸数）は4700件に激増し、5年後には8千件を超える見通しだという。

マロンパティの水をくみ上げるポンプ小屋を案内してくれたアルヒパンさんは、深刻な顔で語った。「私はこの上流の水源を開放し、ラフティング客を入れるのに反対した。水が汚れるのが心配だからだ。日本の人たちの遺産を守りたい」。彼は十代のころ、日本人ボランティアがやって来て、自分たちのために穴を掘ってパイプを埋める姿を間近に見ていた。

「なぜ日本人がやって来て我々のために穴を掘るのか」。事業が始まったころ、これが多くのパンダン住民の思いだったという。村上さんは「ボランティアの意味を説明しても現地の人は理解してくれなかった。日本人が何か



もうけを企んでいるんじゃないかと勘繰られた」と言う。

しかし、パイプラインは日比の延べ約2万人の労力、8千万円の資金を投入して完成した。プロジェクトは、パンダン町民に命の水を供給したが、もう一つ大切なことを残した。それは第二次世界大戦の「和解」という出来事だ。

パンダンはアジア・太平洋戦争の激戦地だった。作家大岡昇平の「俘虜記」はパナイ島周辺のミンドロ島やレ

イテ島を舞台にし、日本軍がフィリピン人に加えた残虐行為と自らの捕虜体験を克明に描写している。

戦争の恨みを乗り越え

フィリピンで戦死した旧日本軍人らは51万8千人（厚労省「援護五十年史」）にのぼり、アジア各国で最も多かった。一方でフィリピン側の死者は111万人ともいわれる。侵攻した日本軍の軍靴で郷土を荒らされ、家族の命を奪われた恨みが到底消えるとは思えない。

だがパンダンでは想像もできないことが起きた。

中心街にその形が残っている。フィリピン人戦死者の慰霊碑のわずか30メートル隣に「元日本軍無名兵士之墓 GRAVE OF WORLD WAR II JAPANESE SOLDIERS」と刻まれた石碑があった。墓石の裏に複数の建立者の名があり、驚いたのは、そこにフィリピン人の名前が

パンダンの中心街にある、水道建設が縁になって建てられた「元日本軍無名兵士之墓」の前で＝筆者撮影

刻まれていたことだ。「ホセ・エバンゲリオ」。戦時中、日本軍と戦ったゲリラ隊長だという。

村上さんによると、彼はパイプラインを敷設する日本人の姿を見て、「私たちはここに20数人の日本兵を埋めた。彼らも戦争の犠牲者だ。掘り起して墓を作りたい」と相談してきたという。墓碑の裏には、日本とフィリピンの平和を愛する人たちが、98年2月に建立したと記されていた。

協会のパイプライン事業があつた戦争に対する償いと彼らは受け取り、そして祖国を侵した日本を許したのだ。

マロンパティから約2キロ離れた標高45メートルの高地に貯水タンクが建設されていた。今年5月、水のフィルター装置が設置される。1億を超える資金はフィリピン政府の補助がついた。パンダン町の副町長は「ここはフィリピン一安全な水とお墨付きを得た。水源の森を守っていかねければ」と語った。われわれは今回、水源の森にジャックフルーツの苗10本を植えた。

中島みゆきは、「地上にある星を誰も覚えていない」と歌う。違う。この旅で出会ったパンダンの人たちは、水道管を埋めた名もない日本人たちの姿を深く心に刻んでいた。

「産婆さん」は村に必要。病院偏重の再考を

JAFSが支援プロジェクトに取り組んでいるネパールの各地を、2月9日から18日まで、スタディツアーしました。現地の人たちとの交流の模様や、同国の現状について感じたことなどを報告します。

「母性愛は自然分娩から」

シンドウパルチョーク郡チヨウタラ村。

ここにはJAFSが1999年に大阪市職員労働組合の支援を得て建設した国立チヨータラ病院産婦人科病棟がある。当時、農村や山間部では、お産はほぼ自宅分娩だったため、出産時の事故が多かった。それを防ぐため、お産の介助者として traditional birth attendant (TBA＝伝統的なお産を介助する女性) が、政府によって任命されていた。その当時海外プロジェクト委員長をしていた大阪府寝屋川市の助産師・大谷タカコ先生にお願いして、2000年から隔年3回にわたり、TBAの女性に、自然分娩による安全なお産をいかに介助すべきか、日本の産婆さんの知識と知恵と技を指導しても

2015年4月のネパール中部大地震で、村の建物の98パーセントが倒壊するという壊滅的な被害を受けた。

震災から4年。少しずつ家の再建が進められている一方、かつての水源が沈下して飲料水の確保が難しくなるとい、深刻な問題を抱えることになった。土地が痩せ、産業もないこの村では、仕事を求めて多くの若者が海外へ出稼ぎに行く聞く。

JAFSはこの村では、震災復興支援と、教育支援、農業支援を行っている。この度は大阪の篤志家の支援をいただき、中学校の校舎を建設して贈呈することができた。引き渡し式の日には学校設立40周年の記念日と重なって、盛大な式典になった。

また、より多い作物の収穫を得るために、村の若者が中心になって土壌改良を進める話が交わされている。震災を契機にJAFSとともに様々な復興の取り組みをしたことで、自分たちの手で自立の手立てを考え、強く踏み出そうとする力が芽生え、若者の背中を押しているのではないかと感じた。

チュニケル村。

土ぼこりが立つ村の辻に集う人と家畜。何十年変わらない風景の村には、JAFSが校舎の増築を支援した小学

復興・自立をめざす若者たちに力づけられた



「ありがとう」。日本から持っていった学用品のお土産に、子どもたちの笑顔がはじける＝2月12日、シンドウパルチョーク郡インドラワティ村



地域の保健婦さんたちに日本の産婆さんの知恵と知識を話す大谷タカコさん（左端）＝2月13日、チュニケル村

らった。

現在、ネパール政府は、助産婦の立ち合いによる病院での出産を強力に押し進めており、TBAの女性たちはお産への直接的な関わりを禁じられてしまっている。

今回も大谷先生は、助産婦、元TBAの女性40名を前に改めて、「お産は病気ではなく新しい命を己が力で産み出すことであり、自然分娩によって母となる喜びを得、母乳を与えることで母性愛は育っていく。この愛情に育まれる嬰兒は豊かな感受性を持つ人間となる」と話された。

参加者からは、病院まで峠をいくつも越えないとたどり着けない山間部の村では、急を要するお産のときに手を出せないもどかしさを訴える言葉が続出した。TBAを必要とする地域がまだ多くあることを痛感した。

ネパール国政府は財政基盤が弱く、予算の一部をODA（政府開発援助）に頼っているため、助産婦養成のためと、用途を指定される支援金が来るとTBAはたちまち廃止されてしまうのだ。実質的な介助者を失った山間部は大きな痛みを受けている。こういう場面に遭遇すると、いつも政治のあり方について考えさせられる。

小中学校の校舎作り支援

同じシンドウパルチョーク郡のインドラワティ（旧ボテシパ）村。

校がある。ここでは地域の保健婦さんを対象に、大谷先生に「母子保健と女子保健」について話してもらった。

また、一昨年に続き再びの訪問となったサックス奏者・清水利香さんの演奏に合わせて、生徒たちが歌い、踊り、楽しい時間を過ごした。

AYSの参加者らが協力

大谷先生の通訳を担当したビマラさんは、チヨータラ産婦人科病棟建設を支える地元の高校生ボランティアだった。JAFSの奨学金で学び、助産師の資格を取得した。その後、大谷助産院で二度、研修生として学んだ。積年にわたる支援は人材を育てる。今日のビマラさんの活躍を目の当たりにして感慨ひとしおである。

この旅を、アジアユースサミット（AYS）に参加した女子学生4名が、ボランティアとして支えてくれた。

現在、大学に学ぶ彼女たちは、AYSに出会ったことをきっかけに、地域開発を本格的に学び始めている。それぞれが恵まれた環境にあることを自覚し、自身が学んだことを、学ぶ機会に恵まれない子どもたちに語っていき、知識を共有していきたいと話してくれた。

この若者の純真な言葉を、JAFSのこれからの活動を力づけてくれるものとして受け取った。うれしい言葉を

身近なゴミから地域・世界見る目を

ネパールで小学生の環境プログラム

JAFSインターンシップ生 レジマ・タパ・マガール（ネパール）

JAFS／AFSネパールは、2018年12月にネパールのシンドウパルチヨーク郡インドラワティ村10区のボテシバで、3日間の環境プログラムを、日本のりそなアジア・オセアニア財団の助成を受けて実施しました。

このプログラムの主な目的は、4年生から6年生までの生徒の環境活動の意識とリーダーシップとを高めることです。そのために、まず自分を信じ、自分や他人を尊重し、行動する前に考え、先を見越す冷静な知識と認識を身

に付けさせます。また、環境に関連する話題に慣れ親しませ、環境保全の大切さ、環境保全に向けたいろいろな対策、環境に対して何が悪影響を及ぼしているのか、環境を保全するためにどのような行動が必要か、について正確な理解を促すことが目的です。

今回のプログラムには、チャンデスウォリ小学校とサラスワティ小学校の2校から合計10名の生徒が参加しました。スルヨダヤ小学校も参加する予定でしたが、悪天候や雨のために道路ががけ崩れで通れなくなり、残念ながら参加できませんでした。2018年8月に行ったプログラムには、この3学校から15人が参加しました。このように昨年から継続的に実施しています。

この取り組みが一番目指すことは、小学校高学年の生徒たちが「環境とは何か、どのようにそれを保全することができるか、そして環境に害を及ぼすことからの結果」を学ぶ機会を得て、環境の重要性について理解し、地域の環境を清潔で健康的な状態に保つために貢献できる活動はどのようなことであるかを理解することです。そして、

同じ世代、同じ立場の友人たちと今彼らがするべき環境の保全と清掃活動などについて意識を共有し、あるいは話し合って理解を広げる場として活用することです。

今回は、身近な環境悪化の現状を知ることと併せて、自分たちのゴミの現状とその種類についての知識を共有しました。そしてフィールドスタディーとして実際にゴミ拾いをし、廃棄状況や種類を観察しました。集めたゴミを生分解性廃棄物と非生分解性廃棄物に分類させ、加えて3R（再利用、リサイクル、削減）によるゴミの削減を学びました。

プログラムが終わるまでに、子どもたちは「環境」についての知識を得るだけでなく、環境保全のために自分たちができできる対策活動を考えるようになっていました。また、実際の行動計画を、それぞれの学校単位で話し合い、発表し合いました。

若い世代の彼ら自身が持っている能力を、みんなが理解していかなければなりません。その理解は、率先して目を向けるべき必要がある家、学校、地域社会で環境活動を実施していくために、非常に重要です。最終的には家、学校、地域の自分の周囲の環境を守る「責任ある行動ができる人」になるのに役立つていくはずで

（翻訳：

JAFSスタッフ 熱田典子）



④ゴミの現状や環境保全の大切さを講義で学ぶ。中央に立つ女性が筆者

⑥みんなで話し合ってきた行動計画を発表する小学生たち

＝いずれも2018年12月、シンドウパルチヨーク郡インドラワティ村



恩師の遺贈で

新校舎が完成

ネパールの地震被災地

「恩師の林和子先生の遺贈をネパール地震で被災した子どもたちのために」と組織孝子様が寄付くださった校舎が完成しました！写真。シンドウパルチヨーク郡インドラワティ村のスリーチャンデソリ・ハイヤー

・セカンダリースクールで、2月12日、校舎2棟、トイレ1棟の譲渡式が行われました。

同校は2015年のネパール大地震で被災し、仮設校舎で授業をしていました。長期計画のもとで子どもたちにとって良い教育環境を提供をしたい、と村と学校が希望して建設基準が決定され、組織孝子様より「林和子様の記念」と被災者の子どもたちの役に立ちたいとの想いが合わさり、現地に新校舎を完成させることができました。

式には日本から5名、学校と村側から300人を超す人が参加し、近隣の先生方や行政関係者も集まりました。「地震後の緊急支援のみならず、学校が教育機関としてこの地域の子どもたちに等しく良い教育を与えることができよう支援くださったJAFSそして林さま、組織さまに大きな感謝と敬意を表したい」とルッド・アーチャル校長があいさつしました。

林さまの記念のボードが各校舎に刻まれ、その思いは日本とのきずなとなつて、子どもたちに学びと共に継承されていくことでしょう。ご支援ありがとうございます。

（JAFSスタッフ 熱田典子）

インドネシア植林ワークキャンプ体験記

JAFS会員 伊藤勝

2月6日より12日まで、インドネシアのアチエ州でのワークキャンプに参加

加しました。日本では真冬。大阪は昼でも最高気温が10度ですが、インドネ



津波防ぐマングローブ海岸に500本

シアでは30度を超える暑さでした。目的は「マングローブ植林と環境教育」。マングローブの植林を地元のひととともに海岸で行うことと、小学校などを訪問して自然保護の大切さなどを子どもたちと共有することでした。今回は、十分な事前準備の時間がない中で、我々の訪問に合わせて、マングローブ植林の準備・アレンジ、小学校などの訪問のアレンジ、環境教育の教材としてマングローブの塗り絵などの準備、その他地元の主婦の人たちとの対話集会のアレンジ、さらに一番大切な日本語・インドネシア語の通訳を一手に引き受けて、予定通り終了できましたのは、ひとえに現地でアレンジしてくださったシャフワイナさん（通称、ウイナさん）のおかげです。我々のワークキャンプを楽しいもの、有意義なものにしてくださいとウイナさんに、心より感謝致します。

インド、スリランカでも多くの犠牲者を出しました。死者は23万人弱、被災者は500万人と言われています。アチエ州の人口は約400万人で、大半が敬虔なイスラム教徒です。従ってビール・お酒は一切飲みませんし、お酒を売っている店もありません。レストランでも、飲み物はジュースやコーヒーなどです。料理はハラル料理で、豚は当然食べられません。またイスラム寺院が多くあり、一日5回の礼拝も、きちんとされています。インドネシアは最近ではコーヒーの産地ですし、アチエ州ではカカオも栽培されています。コーヒーも様々な種類のコーヒーが販売され、喫茶店でも色々なコーヒーを飲むことができます。2月6日の夜に閑空からマレーシアのクアラルンプールに行き、そこで4時間ほど飛行機を待ち、アチエについたのは7日の朝でした。空港には、ウイナさんが迎えに来てくれていました。ホテルに荷物を置いて、早速、津波資料館を訪問しました。現地の人には「津波が来たら山に逃げる」ということを知らなかったそうで、それがこれほどまでに被害を大きくした理由だと思っています。日本の東日本大震災の被災地である東松島市とは、市長が訪問して交流会が始まったようです。

畑に何万本もの苗木が育てられており、500本ほどを車まで運んで、翌日の植林の準備をしました。一人4〜5本も持つと結構重たいです。

翌8日は、午前中は海岸近くの小学校を訪問。日本から持参したクレヨンで絵を描いてもらったり、ウイナさんより、なぜマングローブを植えるのかなどの話をしてもらいました。マングローブは津波の波を消すのですね。また、一緒に「ぞうさん」「幸せなら手をたたこう」などを歌いました。「ぞうさん」の時には、皆で一緒に手でゾウさんの鼻の真似をしました。

夕方に、授業を終えた高校生、苗木を育てている人、その他数十人が海岸に集合し、マングローブの植林をしました。海岸は、小さな牡蠣の貝殻がいっぱいで歩くと痛い所。なかなか苗木を植える穴を掘れません。男子高校生が頑張つて穴を掘ってくれました。そこに苗木を入れて、砂をかけて、ひもで結んで植えました。きちんと育ってくれると良いですね。500本は結構多くて全部植林できませんでしたが、残りは翌日地元の村の人たちが植えてくれたそうです。

9日は、小学校とインターナショナルスクールを訪問しました。ここでは、ウイナさんが準備してくれたマングローブの木を描いた紙にクレヨンで色を塗ってもらいました。また、「幸せなら手をたたこう」などを一緒に歌

環境の大切さ、小中学生・主婦に



⑥（前ページ）村人たちとともにマングローブを植林し、作業を終えて記念撮影。右から4番目に立っているのが筆者。2月8日、アチエ州
⑦学校の教室で、マングローブの絵に色を塗るワークショップ。説明をする女性がウイナさん。2月9日、アチエ州、SMPブンガ・マタハリ・インターナショナルスクール

いました。「幸せなら手をたたこう」は、英語のみならずインドネシア語にもなっていました。翌10日には地元の主婦の集まりに参加し、日本でのごみ分別や掃除などについて、参考までにお話ししました。夜は昼の活動とは異なり、毎晩、地元のレストランに行きました。飲み物はジュースですね。アボガドにコーヒイやカカオが入ったジュースなどいろいろです。料理は、ナシゴレン（焼きめしに好きなものをトッピング）、ミイゴレン（ピーファン焼きそばに好きなものをトッピング）、サテー（牛の串焼き）がメインです。果物の王様のドリアンなども食べました。特にトッピングでは、地元産のロブスターが載ったものもあり、おいしかったです。11日は、10年ほど前にJAFSのメンバーが訪問して植えたマングローブの植林地や市民の森などを訪問しました。立派に育っていました。しかし、まだまだ海岸のほんの一部です。今回の訪問は、3年連続でマングローブ植林をする計画の1年目です。来年も再来年も続きます。地元のひとたちとも良くコミュニケーションをとり、協力しながら、この活動へのJAFS参加者を増やしながら、続くことを願っています。アチエは、人も温かかったです。ありがとうございました。※本事業は公益信託地球環境日本基金の助成金により実施しました。

JAFS創立40周年を前に

2019年10月にJAFSは創立40周年を迎えます。これを機に、今のアジアが抱える課題と本会の取り組みについて、4回シリーズでお知らせしていきます。

日本の公害から教訓を

本会が一番初めに取り組んだ環境支援活動は植林でした。井戸を贈る活動をする中で、井戸ができるその村の周りの木々が燃料とするために切られてしまい、切った分だけ植林をする知恵のような伝承がなかったアジア諸地域で、はげ山や森の減少化現象が起きてきていたことを防ぐためでした。

それまでは自然とバランスを保って共存できていたのが、人口が増えて使う燃料が増え、生活スタイルも変化して、そのバランスが崩れ始めたのです。しかし、これほど急激に世界全体が環境危機に陥るとは、私は当時まだ考えていませんでした。おそらく地球上のほとんど人が今、「これほどまでになるとは……」と驚いているのではないのでしょうか。

私たちがアジア各地で支援活動をする

まり分かっていない様子でした。「マイクロプラスチック」という言葉が浸透したのは、つい最近です。海の生き物に悪影響を及ぼすとして、有機的な汚染状況が大々的に報道され、無視できなくなってきました。社会全体がそのような流れになってきたのではないのでしょうか。

5年前、フィリピンの海岸で学生たちとゴミ拾いをした折に、赤ちゃん用の紙おむつが流れてきたのを見て、衝撃にも近い危機感を感じました。海なので、どここの国から流されているかわかりません。おそらく長時間海をさまよって漂着したとみられます。その中に入っていたゼリー状になる高吸水性ポリマーは、表面が破れてほとんど流れてなくなっていました。海水の中に混じり合って、見えないけれども残っているはずです。鳥肌が立ちました。

海に捨てられたおむつは環境中に400〜450年間残り続ける、とアメリカ海洋大気庁（NOAA）は発表しています。パリ協定は、途上国の温暖化対策に2020年以降、年間1000億ドル（約11兆2000億円）を約束しています。環境維持のためにこの金額で地球が救えるのであれば、安いのもかもしれません。しかし、この原因を作ったのは私たち人間であると思います。

ちなみに日本の廃プラスチック総排出量は899万ト、ごみ総排出量は4317万ト、一人一日当たり925

② 環境支援は今…

進むプラスチック汚染

打ち上げられて海岸を埋め尽くしたゴミの山
＝フィリピン、ソルソゴン州マトノグ町



私たちの日常を見直そう



40年前に植林して立派に育ったインドの木々＝マハラシュトラ州ナグプール

ニールを集める人……が最終の行政回収時間までに順番にゴミ場に来て、自分が必要なゴミだけを回収していきます。焼却炉がないネパールでは、この回収がなければすべてがゴミ山に一緒に捨てられてしまいます。この回収がゴミ山の悪化を救っている、と言っても過言ではありません。

経済的に余裕のある人が購入した物を使って好き勝手に捨て、貧しい人が生活のためとはいえ、その環境維持の一端を担ってくれている現状が、今のアジア社会では多く見られます。私たちの役割を考えずにはいられません。

パリ協定での「気温上昇1.5度未満」の目標を達成するには、各国が現在掲げている温室効果ガス削減量を5倍にしなくてはならないといわれています。またクリーンエネルギーのために毎年2.4兆ドル（約269兆円）という莫大な投資が必要な状況です（国連発表）。その具体的な行動を直接起こせる市民活動を推進するために、私たち

るとき、現地の人々からよく聞かされたのが「日本へのあこがれ」でした。そんなとき私たちは「日本がどんな失敗をし、それをどんな風に克服したかを学んで、まねしてほしい」と伝えてきました。

日本では、数多くの公害が起きました。代表的なのが、高度経済発展の負の象徴である水俣病などの四大公害病による健康被害、環境被害です。近年は花粉症やアレルギーも深刻です。

進むプラスチック汚染

アジアでも2000年、危機を感じさせる出来事がありました。

タイの、当時はまだ少数民族で定住しないピートンルアンと呼ばれる人たちが住む地域に近い、山間の田舎町を訪れた時のことです。当時、消費経済が首都バンコクから外へ広がっていました。現地の人々は新しい便利なモノを、疑問に思うことなく使っている様子でした。どこでも石油系活性剤が売られ、少量しか買えない人々のためには1回使い切りパックが店先に並んでいました。排水がたまっている場所が何力所かあって、異常な泡が生じており、流れが悪いところは黒い水になっていました。

人々の生活を支えているのは山からの水。訪問していた日本のメンバーは一斉に「何とかしないと」と声を上げましたが、現地の人は、その意味があ

が担う役割は大きいのです。

本会は、再生エネルギーとして、バイオガスプラントの設置を支援しています。ネパールの農村1軒がバイオガスプラントを設置すると、年間0.25トンのCO₂を削減できます。

ペットボトル1本から

発展途上国を支援すること併せ、私たちの自身の生活を見直してみることも必要ではないでしょうか。例えばインドネシアやインドに1本の木を植林すると同時に、ペットボトル飲料1本の購入をやめるなどといった協力・協同が、今後さらに必要になってくると思います。

JAFSの特徴は、アジア各地にネットワークが広がっていることです。このネットワークは、これから環境活動を推進するうえでさらにキーになると確信しています。例えば、前記のタイでは、現地で農業を通じて環境活動を推進し、改善につながっています。フィリピンでも、環境と産業とのバランスを伴った農村開発のためにマングローブ植林を行っています。

JAFSは、アジア協会でありアジア友の会でもあります。私たちの人的ネットワークを生かし、いろいろな立場の人たち皆で「環境を守るためもう一歩踏みこんだ市民活動の実践」をし、いく役割を担っていきます。

（JAFSスタッフ 熱田典子）

近くに清潔な水を得た

村人の大半は零細農業に従事し低収入です。学齢期の子どもは学校に通い、80%の村人はトイレを使いますが、衛生観念は高くありません。以前は寺のため池を使っていましたが、乾季は干上がり日に何度も遠くまで水くみに行かねばなりません。水は煮沸して飲んでいますが、村人は体が弱く風邪や発熱、下痢などによくかかり、経済的・精神的にも収入の少ない家計に大きな打撃でした。寄贈井戸によって清潔な水を今までよりも短時間で得ることができ、生活が一変します。

【寄贈者】イオングループ労働組合連合会 様



タケオ州トレアン郡クババ地区タスレン村
受益者：57名（11世帯）／井戸形式：露天式（深さ20m）

【寄贈者】イオングループ労働組合連合会 様

タケオ州トレアン郡クババ地区サーモークロム村
受益者：40名（10世帯）
井戸形式：露天式（深さ21m）



子どもが通学可能に

村民の大半は零細農業で収入が少なく、ヤシ砂糖作り・畜産・小商売や首都での衣料品製造に就く人もいます。以前は、動物も入り乾季には干上がる寺のため池を使っていました。水くみは子どもや女性が日に2～3度行くので子どもは学校を休みがちで、女性は生産的仕事につけません。ため池の水を煮沸して使いますが、病気にかかりやすく、精神的・経済的に大きな負担です。寄贈井戸により衛生環境が向上し、子どもは学校に通って女性も生産的仕事ができ、生活が向上します。

女性が仕事に就ける

多くの村人は農業従事ですが低収入で、ヤシ砂糖作り・畜産・小商売や首都で衣料品製造に就く人もいます。水くみは子どもや女性の仕事で、動物も入る溜め池まで日に何度も水くみに通うので時間がかかり、子どもは学校へ行けず女性は家計の足しになる仕事ができませんでした。子どもは風邪や下痢などの病気にかかりやすく、その度に医者にかかる経済的・精神的に負担でしたが、寄贈井戸により病気が減り負担が軽減され、心配のない生活が送れるようになりました。

【寄贈者】イオングループ労働組合連合会 様



タケオ州トレアン郡クババ地区サーモークロム村
受益者：48名（11世帯）／井戸形式：露天式（深さ19m）

ご寄付には
税の優遇措置が
受けられます

なくそう貧困。命の水を！

井戸の寄贈にご協力ください。あなたの力がアジアの人々の命を助けます。ご寄贈者に完成報告書、写真、パネル写真を届け、現地の井戸に、ご寄贈者のネームプレートを設置します。

■井戸1基の建設に必要な費用■（2018年4月現在）

インド=60万円 フィリピン=33万円
カンボジア=28万円 スリランカ=22万円
ネパール=17万円（パイプライン=25～150万円）
バングラデシュ=浅井戸22万円、深井戸55万円

※5年間のメンテナンス費、現地管理費を含む概算です。※現地資材費高騰により費用を1割増に変更させていただきます。ご理解ご協力をお願いいたします。

■お振込み先■ ・郵便振替 00960-6-10835 アジア協会アジア友の会
・三菱UFJ銀行大阪中央支店 普通1968711 公益社団法人アジア協会アジア友の会

詳しくはアジア協会アジア友の会
06-6444-0587へ

安全で衛生的な水を確保できないアジアの地域に井戸ができて生活基盤が整い、自立へ一歩踏み出せるようになりました。ご寄贈くださったみなさまに感謝申し上げます。

みなさんのおかげで
井戸ができた村

衛生観念が向上しました

主な産業は農業ですが、副業として鶏・豚の飼育とヤシ砂糖作りをしています。学齢期の子どもは全員学校へ行っています。これまでは、ため池の水を煮沸して飲み水や生活用水に使用していました。家庭へのトイレの普及率は15%で、衛生意識は高くはありません。低収入の家庭にとって、病気は経済的に大きな打撃となります。寄贈井戸によって衛生観念が向上し、健全な生活を送ることができます。

※前号の写真が間違っていたので再掲しました

【寄贈者】日本キリスト教団松山教会 様



タケオ州トレアン郡ロネナム地区トメイ村
受益者：41名（8世帯）／井戸形式：露天式（深さ20m）

【寄贈者】イオングループ労働組合連合会 様

タケオ州トレアン郡クババ地区サーモークロム村
受益者：59名（13世帯）
井戸形式：露天式（深さ19m）



安全な水で病気減る

村民の大半は零細農業で収入が少なく、ヤシ砂糖作り・畜産・小商売や首都での季節労働で副収入を得ます。以前は寺のため池を使用し、動物が糞尿をするため不衛生で、煮沸した水でも下痢など病気にかかり経済的に大きな負担でした。乾季はため池が干上がり遠くのため池に行かねばなりません。日に何度も行く水くみのため子どもは学校に行けず、女性も他の生産的仕事ができなかったが、寄贈井戸により病気が減り水くみの時間も短縮し、生活が向上します。

水場から始まる地震後の地域づくり

カトマンズから30km。車で3時間半、さらに1時間山を登った所の村で、ヒマラヤを一望できます。農業をしていますが、バス道まで遠いので作物を担いで売りに行くのは困難で、現金収入にはできません。800m下の水源地までは雨季には道が悪く、水くみの際にケガをしがちでした。2015年の地震でほとんどの家が倒壊し、昨年ようやく全世帯が家を再建できました。水場ができ、今まで悪路で2時間もかけた水くみから解放され、新しい地域作りに意欲を燃やしています。



シンドウルパルチョーク郡メラムチ村
受益者…16名（3世帯）
井戸形式…水道パイプライン

【寄贈者】宗形充弘 様

【寄贈者】Nittoグループ 様

汚水が入り込まない安全な水

ヌエバエシハ州ガバルドン町バントゥグ村
受益者…190名（30世帯）
井戸形式…ポンプ式（深さ35m）



村人の大半は小作人で、地主の農地で稲や野菜を作り日給170ペソ（374円）を得ます。他に仕事はなく貧困から抜け出せません。昔からの井戸は深さ10mしかなく汚水が流れ込んで安全ではありません。村は人口増加が激しく一つの家に何家族もが共同生活するため大量の水が必要で、女性や子どもが遠くの井戸から水くみするのは重労働で1日の大半を費やしました。寄贈井戸のお陰で近くで安全な水が手に入り、子どもたちは学校へ行けるようになりました。

人口が増加し井戸が必要

村人は大半が稲作農業を営んでいますが収入は少なく厳しい生活で、アヒルを育てたり小売店や出稼ぎなど兼業をしています。1日の収入は200～350ペソ（440～770円）で貧しい生活から抜け出せません。以前は20kmも離れた水場で水くみをし何時間もかかったため、子どもは学校へ行けず、農作業にも影響がありましたが、井戸によって安全な水が近くで手に入り、子どもたちが通学できます。人口増加が激しく水がまだ足りないため、さらに数基の井戸が必要で今後の課題です。



ヌエバエシハ州カピアオ町シニビット村
受益者…150名（25世帯）
井戸形式…ポンプ式（深さ36m）

【寄贈者】株式会社 国元商会 様

【寄贈者】イオングループ労働組合連合会 様



タケオ州トレアン郡クバブ地区サーモークロム村
受益者：40名（9世帯）／井戸形式：露天式（深さ20m）

安心して健康な生活できる

多くの村人は農業従事ですが、収入を増やすためにヤシ砂糖作り・養豚や首都で縫製工場に就く人もいます。学齢期の子どもたちは学校へ通いますが、水くみには子どもも含め家族総出で遠くのため池まで行きます。動物が使うため池の水は不衛生で病気の原因になり、経済的に大きな負担です。安全な水を近くで手に入れ、衛生環境や健康状態を改善するために井戸が必要でしたが、寄贈井戸のおかげで村人が安心して健康な生活を送れるようになりました。

【寄贈者】イオングループ労働組合連合会 様



タケオ州トレアン郡クバブ地区サーモークロム村
受益者：42名（10世帯）／井戸形式：露天式（深さ20m）

【寄贈者】角谷道子 様

シンドウルパルチョーク郡メラムチ村
受益者…14名（3世帯）
井戸形式…水道パイプライン



ケガの心配なく水がくめる

カトマンズから直線距離30kmですが、車で3時間半、さらに1時間山を登った所にある、ヒマラヤを一望できる景色の良い村です。村人は農業で生計を立てますが、遠くのバス道まで重い作物を担ぐには無理があり、現金を得るのは難しい土地です。雨季には崖崩れで頻りに孤立します。以前は800m下の水源地に女性が水くみに行っていました。雨季には道が悪くケガをすることがしばしばで、近くで水がくめることが夢でした。水場ができ、新しい地域を作りたいと意気込んでいます。

ママ友の親子が救われ楽しめる場をつくる

●子育てサークル N i c o

N i c o は平成29年、堺市保健センターの赤ちゃんひろばでの出会いから立ち上げたママ友サークルです。初めての子育ては不安いっぱい。家から出ず育児ストレスが溜まる一方。そんな時サークルに顔を出すと同じ悩みに共感できたり、季節のイベントで育児を楽しむ事ができました。「サークルに救われた」とい

う声をたくさん頂きました。堺市より子育てひろば開設の声が掛かり、今度は地元根付いた場をつくることに決めました。皆で知恵を絞り、クラウドファンディングで費用を捻出し、役員がDIY（日曜大工）で内装し、平成30年11月に「笑顔のひろば N i c o」を無事オープン。多くの親子の利用があり、毎月

子育て相談などの講習会を開催し、季節のイベントや編み物教室、高齢者施設でのふれあひも行っています。支援の必要な子育て家庭に、少しでも役に立てばと思います。

大阪府堺市西区北条町
1-5-21
☎ 070-7476-0376
代表：西林和香

新・The 社会貢献

企業や労働組合、各種団体は、それぞれの理念に基づいて活動していますが、いろいろな形で社会の役に立ちたいという気持ちは私たちと同じです。アジア協会アジア友の会の理念にご賛同、ご協力くださっている法人会員を紹介します。

アジア留学生の「なりたい自分」実現を支援

●学校法人 エール学園

中国、ベトナム、韓国、台湾、インドネシアなど東南アジア各国からの留学生が約1500名学ぶ専門学校です。

1967年の学園設立時から現在まで、エール学園の教育は「進学教育」と「職業教育」を貫いてまいりました。学生の夢である「なりたい自分」を実現できるように「つ

くす自分」の想いで職員が誠実に対応しております。
写真は、産・官・学が連携して、留学生が就職などで活躍できる環境を創出することを目的として開いている国際人材活用ネットワーク交流会です。2012年より開催しており、海外ではベトナムのハノイ、ホーチミンでも実施しております。

大阪市浪速区難波中3-9-1
難波ビルディング3F
☎ 06-6647-0013
理事長：長谷川恵一

バンハーンジャムサイ工科大学にできたハッピーバイクセンターで車椅子を寄贈 2月9日、タイ、スペイン、ブリー県



タイに広がる自転車・車椅子活用の輪

JAFSが連携 市民ネットワークが全国で普及活動

2月9日にタイ、スペインブリー県で、大阪府高石市から贈られた車椅子と、同府内から贈られた自転車の寄贈式が、スペインブリー県知事をはじめJAFSから小原純子副会長、橋本隆サイクル・エイド事業担当ら約200名の関係者が出席して行われました。タイアジア友の会（TAFS）のシリニー会長の呼びかけで、地域の社会貢献に取り組んでいるアヌサックさん、アビシャートさんを中心に、タイ全土にハッピーバイク&ウェルチェアーネットワーク（HBNNT）という市民ネットワークが広がりました。

自転車や車椅子を贈るこの事業は、自分たちの力だけではこれらを入手できない貧しい家庭の子どもたち、農民たちに、日本の再生資源を贈ることから始まりました。タイでは、その資源を市民の手で、未来に向けてより良い方向に生かす話し合いが積み重ねられ、今回、HBNNTと連携して新たな取り組みが始まりました。

HBNNTはタイ国内の全国12カ所に拠点となるセンターを設け（今後増やしていく予定）、次のような活動を行っています。

- ・自転車・車椅子の修理・メンテナンスを材料費のみで提供
- ・利用者が安全に乗れるよう、自転車安全講習を実施
- ・環境保全や健康増進、観光産業などにも自転車利用の魅力と効果を呼び

かけ、モーターバイクや車に依存しがちな人々の意識を変える

- ・若い世代に、消費・破壊・浪費ではなく、再生・保全・有効利用の意識改革を進める
- ・すべての自転車と車椅子に番号をつけ、3カ月ごとに利用状況や状態をチェックし、最適な状態で使えるようメンテナンスする
- ・職業訓練の一環として地域の工科大学などで、自転車や車椅子の修理をカリキュラムに取り入れる
- ・安全のために、学校やその周辺に自転車専用道や駐輪場を設ける

自転車や車椅子を贈られた人々は、HBNNTの協力のもと、安全に利用することで、毎日の通学や通勤が可能となり、それぞれの勉強や仕事に取組み自分の将来を切り開いていく力をつけることに集中できるようになりました。自転車を使わなくなったときはセンターに返し、新たな受益者が利用することになります。

寄贈式の後には、受益者やHBNNTのメンバーら約100名が地域の9カ寺を巡ってサイクリング。参拝に来た人々に事業をPRしました。地域のつながり、人と人が協力し合うことよって生まれるパワーや知恵など、私たちが学ぶことが多い訪問となりました。

（JAFSスタッフ 岡本佳子）
◆本事業は競輪の補助を受けて実施しました。



国内外の様々なイベントをHPに載せています。記事についてのお問い合わせはJAFSへ。裏表紙にアドレス、連絡先



ひと味違うアジア学ぼうー市民大学が開学

JAFS 40周年記念事業の一環として1月、JAFSアジア市民大学を開学しました。法人賛助会と国際理解文化委員会の新事業として「ひと味違うアジアを一緒に探求しませんか!」を謳い文句に、アジアを熟知した第一線の教授陣による講義と受講者との交流をねらいにしたものです。

昨年12月26日には奈良大学名誉教授で本学学長に就任した實清隆氏による主旨説明と開学記念講演の後、ハノイ在住の桂良太郎・日越大学教授が生の特ナム事情を講義しました。写真。教授の体験に基づくアジア人と日本人の気質や習慣の違いは興味深く、開学記念にふさわしい内容でした。

第1回(1月12日)は西澤信善・神戸大学名誉教授による「アジア総論」(大戦後のアジア経済の潮流)、第2回(2月9日)は石原潤・奈良大学元学長による「中国を視るー都市」を開催。講義後は、各回25名ほどの受講者と熱い議論が交わされました。

本講座は、原則として毎月第2土曜日14~16時に、当会のある大阪市西区の官報ビル8階会議室を会場に開催。年間受講のほか、ご希望月のみの受講も可能です。ぜひご受講ください。

(JAFSスタッフ 柿島裕)

「応挙と幽霊…」 講談楽しみ新年会

第6弾JAFS社員クラブ新年会が1月29日、大阪市北区の割烹うおまん中之島店で、25名が参加して開かれました。卓話者は、50歳を超えてから講談師になった異色の女性、旭堂南照さん。写真。演目は「応挙と幽霊の太夫」。京の絵師・円山応挙が長崎で描いた遊郭の不遇な太夫の最後の姿絵が、京の茶屋で話題になり、茶屋は再び繁盛する。その絵の太夫こそ、幼くして誘拐された茶屋の娘であったというストーリーです。

講談は、400年以上愛され続ける大衆芸能で、主に歴史にちなんだ軍記物や人情物を読み語る伝統話術です。南照さんは人情物を得意とし、「パン・パン」と心地よいリズムで釈台を小拍子で叩く音と流暢な語りに思わず引き込まれました。参加者は、新年に



百貨店で井戸をPR



ふさわしい新春講談と31階からの大阪の夜景を満喫しました。

(JAFS社員クラブ世話人 笠谷正博)

一般財団法人H20サンタは、阪急・阪神百貨店をはじめとするH20リテイリンググループの社会貢献団体です。阪急うめだ本店9階の祝祭広場でこれまでも、当会の活動を紹介する機会をいただけてきました。2月16日午後2回のトークイベントでは、司会者のインタビュに答える形で、実物の水瓶を見せながらアジアへ井戸を贈る活動について紹介しました。写真。買物途中の女性をはじめ一般市民の皆様へ直接、JAFSの活動を知っていただく機会を頂戴し、とても感謝しています。次回は7月27日、同会場で開催の予定です。

(JAFSスタッフ 柿島裕)



マナー魚ッチング
母ドラゴン



心を表す『ばけもの図鑑』



幸せ三銃士
わすれーだー



む土水でも、自然の中で心を開いた子どもたちに自分の内面に目を向けてもらおうと考えたのです。

まず参加者にリーダーが次のように説明しました。①ばけものはそれぞれの気持ちの中にあるものを表現する②絵にして色を付けることで、イメージを創り出す③説明文として言葉に表す④自分の空想のばけものを具現化し結果として心の中のモノを吐き出す。

空想のばけものの絵や文を書いても、その意味や表現することの大切さを理解してもらうことが大変でした。元は、なかなか自分を出さない子どもが心の中をばけもので表現すること、人とのつながりを作るようになればというプログラムです。哲平さんが背景を付けて仕上げ、1月に4冊の冊子が完成しました。

写真は、そこに載せた作品の一部です。

子どもたちが思い思いの説明を付けています。「良い子にしている家にとりつく。そして、その家、家族に幸せをもたらす(幸せ三銃士)」「わすれ物をした人の所へわすれたものをとどける。たいへんな母のために届けてくれたり(わすれーだー)」「みんなの母の邪念が集まってできた。おこつたら手がつけれられない(母ドラゴン)」「いつも川を見張っていて、川にゴミを捨てた人や汚したりいたずらした人の所に行つて、かぎ爪でつかんで水の中へしずめて魚にする(マナー

魚ッチング)」

哲平さんに「子どもたちのばけものは、優しく好意的なものが多かった」と言ってもらい、ホッとしました。ぜひ一度ご覧ください。JAFS事務局に置いてあります。子どもたちの目にはこんな風に映つてると感じられます。

アジアのちびっこ画伯たちの絵画展

鳥取県にあるコミュニティプラザ百花堂が、アジアの子どもたちが描いた絵画展「アジアのちびっこ画伯たち」の巡回展を開きました。写真。

当方は主に、県内で活躍する作家を中心に、絵画・書・写真・陶芸・工芸など様々なアート作品発表の場として利用いただき、文化発表の拠点のひとつ

「土と水と緑の学校」は毎年8月に和歌山県新宮市で、3月には京都府南丹市美山町で開催します。参加者、リーダー、ボランティアなど多くの人で成り立っている、未来ある子どもたちの環境教育キャンペーンです。

(JAFSスタッフ 山竹継男)

つととなっています。本展は鳥取、米子、倉吉の3市で、百花堂企画展として毎年開催しております。今回はJAFSからアジア11カ国55点の作品をお借りしました。

子どもたちの純粋な目を通して描かれた絵画からは、各国のお国柄が伝わり、正月や宗教行事、自分の住む町、学校の様子や日常の生活風景などが、絵の具やクレヨンで色彩豊かにのびのびと描かれています。会場には来場者が自由に絵を描いて楽しめるコーナーを設け、親子で楽しむほほえましい姿が見られました。

この絵画展を通じて、私たちが位置するアジアの国々に親しみをもち、生活・文化に興味を持つ人たちが増えることを願っています。また、子どもたちの絵に刺激されて絵を描く人たちも増えてくれればと思います。

(コミュニティプラザ米子百花堂

事務局 長谷川嘉子)

個人情報につき非掲載

アジアの友から

A F S バンガロール代表
M・R・カムレ

次代を担う若者育て 日印有効のかけ橋に



私は1956年の生まれで、78年にインド国家公務員試験（IAS）に合格した後、国家公務員の道を歩んできました。88年にカルナータカ州ビジャプールの市長に任命され、J A F S と出会いました。

それからJ A F S のインド提携団体であるB S V I A 代表のクンバル氏やJ A F S の村上事務局長と話し合いを進め、96年11月に日印友好学園コスモニケタンの開校にも関わることができ、2017年2月には盛大に祝われたコスモニケタン学園

20周年記念式典にも参列しました。

その後、私自身は、カルナータカ州政府の総務、財務、運輸、電力、水源の各要職を歴任しました。南インド5州の運輸担当の時は、日本の新幹線の導入に尽力し、2014年に退職。現在はカルナータカ州運輸部会長に就任しています。

一方、2010年にA F S（アジア友の会）バンガロールを設立し、2016年には、第26回アジア国際ネットワークセミナーをバンガロールで開催しました。現在A F S バンガロールの会員は約50名で、さらに活動の輪を広げたいと考えています。

バンガロールには350社余りの

訃報

当会理事 大倉達也 儀

2018年12月15日に永眠いたしました。

故人の冥福を祈るとともに、

皆様からの生前のご厚誼に感謝いたします。

日系企業が進出しており、日印のゴルフコンペなどを通じて親交を深めています。またこの度、J A F S の協力でバンガロールに開校する職業訓練学校は、次代を担う若者の育成の場としてとても期待しています。

今年2月に、A F S バンガロールの有力メンバーで養鶏場経営者のスレシユラージさんと私の息子と3人で日本を訪問した折には、J A F S 会員の皆様と楽しい交流の機会をもてましたことをとても感謝しています。これからも、末永くより良いパートナーシップを続けていきたいと思っています。

（インタビュアー

J A F S スタッフ 柿島裕）

JAFS創立40周年 多彩な事業

公益社団法人アジア協会アジア友の会（J A F S）は1979年10月に創立されてから、今秋で40周年を迎えます。これを祝って今年10月5日（土）に大阪市中央区のつるやホールで記念式典を開きます。この40年間

の歩みをまとめた記念誌の発刊するほか、若者からアジアの未来についての提言を募集する「作文コンテスト」、中長期ビジョンの策定、チャリティーコンサートなど、多彩な事業を計画しています。

3月8日、「J A F S 40周年記念委員会」（委員長・小原純子J A F S 副会長）が開かれ、40周年記念事業の骨格についての報告がありました。同委員会では式典、募金、記念誌発刊、中長期ビジョン策定、会員サービス（永年功労者表彰など）、作文コンテスト、記念イベントの7つの分野に分かれて事業に取り組んでいます。

記念誌で歩みを紹介

中長期ビジョン策定

チャリティー音楽会

詳しい応募要領を紹介）の入賞者を表彰します。

記念誌には、J A F S の40周年の歩みや海外の提携団体のメッセージ、井戸や学校などの建設、植林などのプロジェクトを紹介し、中長期ビジョンでは「これからの10年―50周年に向かうJ A F S のビジョン」を策定します。

作文コンテストの課題は「アジアの未来―私の提言」。記念イベントはチャリティーコンサートなどを計画。募金委員会では4月から会員らに募金を呼びかけます。

「アジアの未来」作文コンテスト 作品を募集

経済や環境、人権、安全保障などの面で状況が目まぐるしく変化している今日、アジアの未来はどうあるべきか。本会創立40周年に当たり、あなたの提言を募集します。

【テーマ】アジアの未来―私の提言

【応募資格】18歳以上25歳以下の若者（学生、留学生、社会人）

【原稿】400字詰原稿用紙4枚以内。本文の前（原稿用紙枠内）に氏名と所属を記入してください。

【使用言語】日本語

【応募用紙】下記 Web サイトより所定の用紙をダウンロードの上、必要事項を記入し、原稿用紙とともに右記の宛先にお送りください。

【応募期間】2019年4月10日（水）～7月20日（土）

【締め切り】2019年7月20日当日消印有効

【WEBサイト】<https://jafs.or.jp/jafs/40th-essaycontest/>

【審査】委員長：萩尾千里（JAFS会長）、委員長代理：村上公彦（JAFS創設者・事務局長）、審査委員：JAFS理事（マスコミ関係者、大学教授、医師）ら

【賞及び賞品】優秀賞（1名）：5万円と副賞、佳

作（3名程度）：1万円と副賞

【入賞発表】本人に9月中旬頃に通知し、授与式後にJAFSホームページで発表・本誌に掲載

【賞状の授与】JAFS40周年式典（10月5日）で授与式を開催

【個人情報の取り扱い】応募作品に記載されている個人情報は本コンテストの運営に必要な範囲で利用します。本人の同意なく転用しません

【主催・問い合わせ先・送付先】

公益社団法人アジア協会アジア友の会（JAFS）
「作文コンテスト」係

〒550-0002 大阪府大阪市西区江戸堀1-2-14
肥後橋官報ビル5階

電話：06-6444-0587 メール：asia@jafs.or.jp

※メールでのお問い合わせには、タイトルに「作文コンテスト募集に関する問い合わせ」とご記載ください。

ちですが、もちろん国内でも、工場や自動車、身近な野焼きや喫煙、鉄道の車輪とレールの摩擦などもPM2.5の発生源です。足元を見つめてみることも必要ですね。隣国の環境改善を見守りつつ。

PM2.5濃度が環境基準を大きく超えなければ健康影響の可能性は低いのですが、特に呼吸器・循環器系の病気の人、高齢者や子どもなど影響を受けやすい人は、PM2.5濃度が高い際には、PM2.5を遮断できるマスクをするなど注意が必要です。

海洋汚染のマイクロプラスチックといいPM2.5といい、環境課題で取り上げられることの増えてきたマイクロ。これからの時代、基礎単位の何倍かを表す他の語と共に馴染んでいくとよいかもしれません。千倍がキロ、その千倍がメガ、さらに千倍がギガ。逆に小さい方へ向かって千分の1がミリ、その千分の1がマイクロ、さらに千分の1がナノです。

ちなみに昔から使われていたミクロン。実はマイクロメートルのことです。また“マイクロ”バス。マイクロの定義から、普通のバスの千分の1のそのまた千分の1の大きさのバスを想像すると、マイクロのイメージが覚えられるかもしれません。

PM2.5やマイクロプラスチックなど、目に見えないマイクロが地球を汚染している現実を、心で見える必要がありますね。（J A F S スタッフ 川本 裕子）

JAFS 創立 40 周年

JAFSは本年10月10日に創立40周年を迎えます。1979年の活動開始以来、多くの皆様にたくさんのご支援ご協力をいただいたことへの心からの感謝と、これからもさらに活気ある歩みを進めるために、様々な記念行事を予定しております。今後のご案内にご注目ください。

編集後記

井戸のない村に井戸が出来ると病気が減り、水くみから解放された子供たちが学校に通えるようになった。でも井戸があっても雨不足で干上がっているケースもある。どこでも安全な水が得られる日は来るのか。（和）

子ども達の「達々」は当て字で、今の学校で教える常用漢字の音訓にありません。水汲みも「水くみ」とかな書きが正しい。年配の筆者はついつい漢字を多用しがち。若い読者が親しめるように編集しています。（黒）

今年にはJAFS 40周年。アジア市民大学をはじめとする新しい活動も始まりました。40年の節目を通過点ではなく、更に飛躍する絶好の好機と捉え、共に新しいJAFSを生み出していきたいと思います。（裕）

カトマンズの道路各所に気温と空気汚染値の電光掲示が設置されていた。海外留学後、自国の環境改善のためにと考案されたものらしい。日本で働く外国人にも日本の知恵を是非お持ちかえり頂きたいものです。（典）

さあ春です。桜の花が咲き、心暖かくして幸せを噛みしめましょう。と同じく、恵まれないアジアの子どもへ少しでも、たとえ毎日10円でも50円でも100円でも支援を加速しましょう。貴方の温かい支援よろしく。（金）

環境コラム

PM2.5とマイクロ

先日テレビの天気予報で、PM2.5予報を初めて見ました。冬から春はPM2.5の濃度が上昇しがちな季節です。冬は大気汚染しがち。地上では燃焼を伴う暖房や自動車の利用が増えますが、冬は地面が温まりにくいため上空と大気対流が起りにくく、汚染物質が発生した地上に留まりがちだからです。

春は、アジア大陸から黄砂が飛んでくる季節。併せて飛来するPM2.5など汚染物質も、近ごろ注目される話題です。国内で花粉が飛ぶ時期とも重なり、アレルギーや呼吸器系の症状を持つ人には特にPM2.5の影響が心配されています。

そもそもPM2.5とは？おさらいしてみましょう。PMはParticulate Matter（粒子状物質）の頭文字。そのうち直径2.5μm（マイクロメートル）以下の粒子がPM2.5です。μmはmm（ミリメートル）の千分の1の単位で、PM2.5は髪の毛の太さの30分の1、スギ花粉の10分の1程度の大きさです。人間が吸う空気中の異物は10μmより大きければ鼻の粘膜や鼻毛などで除去されますが、それより小さいと気管・気管支、さらに2.5μmより小さいと肺の奥深くまで入り込んでしまい、呼吸器系や循環器系疾患のリスクを上昇させると考えられており、2009年にPM2.5の環境基準が定められ、関心も持たれ始めています。

アジア大陸から飛来するPM2.5に注目が集まりが

A. 維持会費	年額1口	12,000円 (月額1,000円)
B. 賛助会費	年額1口	6,000円 (月額600円＝振込手数料含む)
C. ジュニア会費（高校生まで）	年額1口	1,000円
D. 団体会費	年額1口	20,000円
E. 法人賛助会費	年額1口	50,000円
会費・寄付の振り込み先		
郵便振込 00960-6-10835		
三菱UFJ銀行大阪中央支店 普通1968711		

入会ご案内

皆さまが会員となつてサポートして下さることで、安定した活動計画ができます。継続した活動をしていくためにも、ご協力をお願いいたします。



募金にご協力をお願いします

アジアの安全な飲料水がない地域で
貧困に苦しむ人たちを支援する活動に使われます

郵便振替 00960-6-10835 アジア協会アジア友の会

編集・発行：公益社団法人 アジア協会アジア友の会

〒550-0002 大阪市西区江戸堀1-2-14 肥後橋官報ビル5階

☎ 06-6444-0587 FAX 06-6444-0581

URL: <https://jafs.or.jp> E-mail: asia@jafs.or.jp



2019年4月 137号 発行人：萩尾千里 編集人：村上公彦

広報企画委員長：法花敏郎

編集アドバイザー：松本 督、黒沢雅善

編集スタッフ：熱田典子、岩崎準一、大本和子、柿島裕、

金井英夫、川本裕子

印刷製本：あさひ高速印刷株式会社

▲信心深い人が多い仏教国タイで見られる
早朝の托鉢風景。托鉢するお坊さんに信者
が寄進するのがタンブン（タイ語で徳を積
むという意味） 2019年2月、タイ・
スパンブリー県

▲表紙の写真 パンダン水道パイプ
ラインで、ポンプ室から水を送るパ
イプが2本に増設された 2019
年2月、フィリピン、アンティケ県
パンダン町。4〜7ページに特集記事